

---

---

## 胃原発胎児消化管類似癌 22 例の臨床病理学的検討とその診断意義について

石原 由希、 佐野村 誠、 西田 光志、 坂口奈々子、 沼 圭次朗、  
上嶋 一也、 西川 知宏、 西谷 仁、 佐々木有一  
(社会医療法人仙養会 北摂総合病院 消化器内科)

---

### 【はじめに】

胃癌の特殊組織型である胎児消化管類似癌は、胎児消化管上皮に類似する細胞から構成される腺癌であり、胎児消化管上皮に発現する AFP, Glypican3, SALL4 のいずれかが陽性であるものと定義され (Murakami T, Yao T, et al. Gastric cancer: 2016), 従来呼称されていた AFP 産生胃癌を包括した名称である。

### 【対象・方法】

当院で胎児消化管上皮マーカーの検索により胃原発胎児消化管類似癌と診断した 22 例について臨床病理学的に検討した。

### 【結果】

1) 年齢：平均 72.1 歳 (58-88 歳)。2) 性別：男性 21 例，女性 1 例。3) 主訴：上腹部痛，黒色便，貧血など。4) 血清 AFP：全例高値。5) 血清 PIVKA II：測定された 20 例中 14 例で高値。6) 腫瘍占拠部位：U 領域 3 例，M 領域 9 例，L 領域 10 例。7) 肉眼型：1 型 3 例，2 型 14 例，3 型 3 例，5 型 2 例。立ち上がりが正常粘膜の肉眼形態：16 例 (72.7%)。8) 主たる病理組織型：por1 16 例，tub2 5 例，tub1 1 例。9) 臨床病期：Stage IV (肝転移) が 14 例 (63.6%)。10) 予後：手術が施行された Stage II・III では長期生存の症例もあったが，Stage IV の症例の殆んどが 1 年以内に癌死の経過を辿った。

### 【考察】

新規の胎児消化管上皮マーカーの開発により提唱された胃癌の一型である胎児消化管類似癌の疾患概念を認識する必要がある。予後不良な疾患であるが，Ramucirumab が奏功した報告が散見されており，本疾患を診断する意義があると考える。男女比は圧倒的に男性に多く，胎生初期の腸管分化を示す胃癌として性差にも関与している可能性がある。